近づく13回忌

写真上は、アソニツト工場で仂いている遺族の人びと。下は万田作業所で仂いているCO患者。

要求実現へ団交開始

不安と苦しみのなかの患者と遺族

三池労組、たたかいを決意

三池大災害十三回忌が近づくにつれて重大な情勢が生まれようとしていることと重なりながら、かねて三池労組から会社に提出されているCO患者・遺族の要求の実現をめざす団体交渉が、注目のうちに東京の本社で開始されることになった。

すでに三池労組は七日開催した中央委員会で、交渉開始に合わせて中央に抗議団をおくり、またストライキ、座りこみなどの統一行動を積みあげながら、要求貫徹をはかることを意志統一した。

要求は切実

三池労組が会社に対して、CO患者と遺族の要求を出したのは昨年の十二月のこと。やがて一年になる。

要求の内容は、CO患者からのものと遺族からのものとに分かれCO患者の分が二十八項目、また遺族の要求が十二項目。

要求の中身は切実なものばかりで、すでに要求提出当時くわしく本紙が、またこんどはビラで改めて伝えている。したがってその全文は省略するが、おもなものを拾って見ると——

CO患者からの要求

——休業保障は平均賃金の百パーセントとし、最低補償額を同職種の平均賃金とすること。

——訓練のため運動服・作業服及び用具は、夏、冬にそれぞれ一着あて支給すること。

——停年により退職する者、及び退職した者に対し、傷病見舞金として一千万円支給すること。

——退職後死亡した場合、在籍者同様の取り扱いをすること。

——年一回、精密検査をすること。

——精密検査・アフターケアー診察の結果治療を必要とする場合その治療費、交通費、ならびに休業補償費を支払うこと。

退職者のため職場を造成し就職を完全確保すること。

(ほかは省略)

遺族からの要求

——待機手当(就労不能の遺族の生活補償)月額六万円(現在最高四万円)、両工場(アソニットと三池縫製)勤務者の生活扶助手当、及び生活特別援護手当一日当たり二千円(現在七百円)とし、さらに今後は、三池鉱業所勤務者のベースアップの平均額を、四月一日以降分増額すること。

——今年は十三回忌に当たり、御仏前を一柱につき二十万円支給すること。

——両工場勤務者の労働条件の改善。

——遺族年金受給のない遺族に年金相当額を支給せよ。

——アソニット工場が実施する東本願寺参拝を、遺族全員に対して実施せよ。

——両工場(上掲)勤務者で、就業不能により退職した場合、及び両工場勤務者以外の遺族で労働不能者については、待機手当を支給すること。

不安と苦しみ

三川鉱炭じん大爆発(昭和三十八年十一月九日発生)から満十二年、三川鉱坑内火災(昭和四十二年九月二十八日発生)から満八年たった。

が、右の両災害がつくり出した大量の犠牲者遺族とCO患者は、その後資本主義制下のわが国に襲いかかってきた深刻な不況、はげしいインフレーションという事態も加わって、果てのない不安、苦しみ、悩みにさいなまれている。

それにCO患者の再発・入院が相いつぎ、三池労組の組合員の患者だけでさえすでに十七人もの死者(職組・三池新労組の患者数はかくされているため判然としない)が出、患者たちはその恐怖とさえたたかわなければならぬ状態で放置されている。

うち続く災害

一方、三池の各ヤマの災害は、「石炭見直し」が取り沙汰される情勢のなかでさえやまず、すでに今年坑底で命を奪われた労働者三人、大爆発以来ちょうど百人の犠牲者を数える。

問題の高温職場もそのまま。三井資本は、今もなおかつ、人命無視・保安軽視・生産第一主義を押し通しているわけで、特に大災害犠牲者の十三回忌に当たる今年はまた全組合員と家族の怒りのもりあがることも必至である。

職場ごとに、しだいにたたかう体制も固まっている。

× ×

四山指導部の小川開アパート地域分会は、その夜さっそく悲しみの遺族を弔問、志を仏前に供えたが、三池労組では全組合員、心から哀悼の意をささげている。

×

なお四山指導部は、こんどの災害に見られる問題点として、次の五項をあげている。

(一)この払は、いままで荷圧がひどく、自走枠が抑さえられ、たびたび固着現象が起きていた。

(二)現場の係員は規格立柱であった、といっているが、単独立柱があった。

(三)天井がバラバラきているので鉄柱五本、坑木十本で補強立柱をした、といっているが、会社は、鉄柱補強十四本といっており、明らかな食い違いがある。

(四)係員は、払跡が部分的に吊り天になっていた、といっているが「NO・1箇所よりどこまで吊っていたか」の質問に対し、把握してない、といっている。

(五)会社の説明では、鉄柱十四本坑木十本補強しなければならない現状にある、としても、係員は払跡の実態の把握もできず、災害時点まで二カット半の採炭を強行している。

黒田さん(新労組員)災害で死亡

三池労組、ストで抗議

表彰とひきかえに、命奪う資本

九月七日、四山鉱(加藤紳二鉱長)で発生した災害は、またしても一人の坑内労働者の命を奪い、職場のはげしい怒りを呼び起こした。三池労組では、翌——八日全組合員が時限ストライキをうって会社に抗議したが、また当の四山指導部の全職場分会はそれぞれ独自に抗議行動を起こし、つぎつぎに鉱長室に押しかけては鋭く、鉱の災害責任を追及した。

犠牲が示す問題点

犠牲となった人は、払採炭工の黒田建一さん。今年三人め、大爆発の翌三十九年以来ちょうど百人めの犠牲。

四十八歳。三池新労組員で、大牟田市小川開のアパートに居住。

災害が起きたのは四山鉱の坑底で、坑口より七千六百メートルほどはいった、五百二十メートル坑道六十添御上層西十片払の落口。(海面下、深さ四百七十八メートル)

災害発生時刻は、七日午前三時十分ごろ。

坑道は、天井までの高さ九メートル。

黒田さんは、送炭ベルトコンベヤーを操作していた。(新聞の報道に従う)

そのとき背後に、バラバラどものが落ちる音を聞いた。とっさに坑道の奥の方へ、難を避けた。

そのあとで、天盤が長さ六メートル、幅四・三メートルにわたって崩落したのである。

そのため、ちょうど天井に沿って切羽まで伸びていた三本のパイプ(四インチ。保冷用、揚水用、送風用)がへし折れ、黒田さんはそのへし折れたパイプとドライブ(パンツアーコンベヤーの原動機が据わっている部位)の間に、体をいきなりはさまれ、罹災してしまった。

結果はすでに明らかなように、罹災して二時間後の、その日の午後五時十分には、肋骨多発骨折、肺損傷のためかつぎこまれた三井天領病院で息をひきとった。行年四十八歳。

妻キミエさんは余りのことに茫然自失、八日早米来町の勝光寺で営まれた社葬にも、まわりの人びとに体をささえられながらかろうじて体を運んでいたという。

黒田さんは四山鉱に、昭和二十一年から坑内夫として働き、今年まで九年連続、優良社員表彰を受け、今年は特に夫婦同伴の東京旅行(十月予定)を目前にしていたほどの、ベテランの採炭工。

それが一転してこの運命に命を奪われたのだが、この事実は何よりも、利潤のためならば、一片の表彰状とひきかえに、働く者の命を奪っても何とも思わない、三井独占資本の本来的な性格をまざまざとつきつけており、怒りをおさえることができない。

砂川鉱でまた災害

異常出水で多数死亡

十日前、ガス突出事故で五人の死傷者を出したばかりの、三井石炭砂川鉱業所(十塚泰二郎所長・北海道空知管内上砂川町)の砂川坑で、八日夜、こんどは坑内の異常出水による落盤事故が発生。五人の坑内労働者が閉じこみられ、ついには全員死亡が確認され、世見をおどろかした。

新聞は、「とにかく掘れるだけ掘れ」というわけで、保安を会社がサボったのが原因——と指摘する、現場の労働者の談話を伝えている。

同鉱では、昭和四十八年三月に落盤で五人死亡。昨年十三月ガス爆発で十五人死亡。今年八月三十日ガス突出で二人死亡、三人重傷——と災害がつづいてきた。これは何より石炭見直しにとつて重大問題を提起している。

なお三池労組は、会社側に電報で抗議する一方、組合に対して全組合員が拠出して心からのカンパをおくった。

中央委が意志統一

三池労組は、九月七日大牟田社会福祉会館で中央委員会を開催、命を守るCO闘争、統一活動の具体的推進、宮浦鉱鉱長室事件の上告などで意志統一。炭労中闘や高温対策闘争などの報告を承認した。

なお、CO闘争は急速にあわただしさを増してきた。十八日から は、三川鉱正門前で座りこみ。

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話 ③3033番 ③3034番
編集兼発行人 山下 開
半年間1,000円 送料共